平成 21 年 3 月 31 日

平成20年度教育研究支援プロジェクト経費成果報告書

プロジェクトチームの代表者　コース等名幼年発達支援

氏　名　・横川　喜美代

プロジェクトの名称	自然プロジェクトにおける「幼児教育実践力尺度」の有効性に関する研究	配分予算額	円 955,000
プロジェクトの概要	本プロジェクトの第一の目的は、幼児教育専修の学部学生が自然体験活動の計画・実施・振り返りのプロセスを繰り返すことによって、保育実践への省察と子ども理解を深め、子ども理解に基づいた教材研究が促されるという命題を明らかにすることである。平成20年5月、6月、10月、11月、平成21年1月に実施した5回の活動は、春の自然遊び、水と遊ぶ（大型シャボン玉）、秋の自然遊び（落ち葉やドングリ）、風と遊ぶ（大型凧、連凧など）、等の活動を計画し、実施し、振り返り（反省会）を行った。最後の反省会の中ではテレビ会議システムを利用し、附属幼稚園の教員・保護者と、大学の教員・学生・院生が合同で振り返りの会をもった。また、平成21年2月には、学部3年生が自然プロジェクト成果発表会を行った。 第二の目的は、昨年度作成した「幼児教育実践力尺度」などを用いて、学生自らが活動の振り返りを行うことで、学生が保育実践力を培うための方向性をいかに認識していくのかを明らかにし、尺度の精密化を図ることである。		
成果の概要	①学生による保育実践への省察と子ども理解・子ども理解に基づいた教材研究 ・学生の「気づき」についての分析 学生がプロジェクト終了ごとに作成するレポートを分析すると、保育実践への彼らの取り組みについての「気づき」が、次のように変化していくことが明らかとなった。学生の「気づき」は，漠然とした不安や附属幼稚園教員・上級生を「何となく」賞賛する段階から、モデルの動きを通してより具体的にどうすればよかったのか、を学ぼうとし始め、最終的に子どもの自然遊びに学生自身が保育者としてどのようにかかわればよりよいのか、と考える段階へと変化をみせる。また、「気づき」を促す要因も、主に附属幼稚園教員から学んでいた段階から、3年生に		

は「子どもから」学ぼうとする段階へと移行する、という点も指摘できる。

・子ども理解に基づいた教材研究の重要性

学生が成果発表会で自分たちの取り組みを自己評価したところによると、「かかわりを重ねた分、子どもの遊びを予想しやすくなった。」「徐々に教材研究の必要性を感じ、何度も思索してどの素材の教材が適しているかを考えることができた。」と述べていることから、子ども理解を深めることと教材研究を行うことの不可分性を認識できたものと考える。同時に「教材研究で行ったことと、実際に子どもたちへ指導することを比較すると、相違点が出てくることがあった。」というコメントもあり、さらなる取り組みが必要であることがわかった。

②「保育実践力尺度」について

・尺度の精密化

「保育実践力尺度」については、昨年度のプロジェクト研究において59項を仮説的に設定した。本年度は尺度作成の手続（項目反応分布の正規性、GP分析、I-T分析、探索的因子分析、信頼性分析）を踏み、4因子26項目が抽出された。この4因子についても信頼性が担保されたため、「指導計画力」「指導展開力」「共感的指導力」「省察的指導力」と命名した。4つの下位概念から構成される26項目の「保育実践力尺度」の妥当性を確認するため、確証的因子分析を行った。その結果、4因子構造の構造方程式モデリングはカイ2乗検定の結果、棄却されず（ＲＭＳＥＡ＝0.031）、一定水準の妥当性が担保された。したがって、「保育実践力」尺度は、「指導計画力」「指導展開力」「共感的指導力」「省察的指導力」の４つの構成概念からなる26項目で測定することが有効であることが示された。

・尺度活用の方針

本年度以降、この「保育実践力尺度」は各年度のプロジェクト終了後及び幼児教育専修の主要実習（保育実習・施設実習・幼稚園実習）後に、学生に自己評価させ、学生が４年間で身につける実践力の方向性と現在地を確認しながら習得していく道筋を明確化することに役立てる。また、自然プロジェクトや実習等の意義について教員が考察する資料として活用していく予定である。

（注）１．箇条書き等により簡明に記入すること。
２．概要については，８００字程度にまとめること。
３．研究協力者として院生等が参加している場合，院生等の報告書があれば添付すること。
４．なるべくパソコン等で作成願います。